

追悼 谷口義明さん

宿敵？谷口義明くんの思い出

福江 純

e-mail: KHF07427@nifty.com

今年（2026年）はじめ、tennetに流れた訃報を読んで一瞬目を疑った。え、1月9日に亡くなっただって？ あの絶対に死にそうにない男が！？ あれほど型破りな人間には、少しだけ型破りな人間からの、かなり型破りな思い出話が似合いそうだ（勇者ヒンメル*1なら、そうしただろう）。以下、ほんとにバカバカしいことしか書いていないので、真面目な方は読まない選択を推奨する。

まずは面倒だが略歴ぐらい書いておこう。

1954年12月23日 北海道旭川生まれ
 1973年 東北大学入学
 1978年 東北大学大学院へ進学
 1984年 同博士後期課程終了
 1985年 日本学術振興会一般研究員
 1987年 東京大学東京天文台助手
 1988年 東京大学天文学教育研究センター助手
 1991年 東北大学助教授
 2006年 愛媛大学教授
 2007年 愛媛大学宇宙進化研究センター長
 2016年 放送大学教授
 2026年1月9日 逝去

専門は広く銀河の観測でいいのかな。「すばるディープフィールド」や「COSMOS」など、多くの重要な観測プロジェクトに関わっている。そして論文・著書多数、この話はあとでたっぷりし

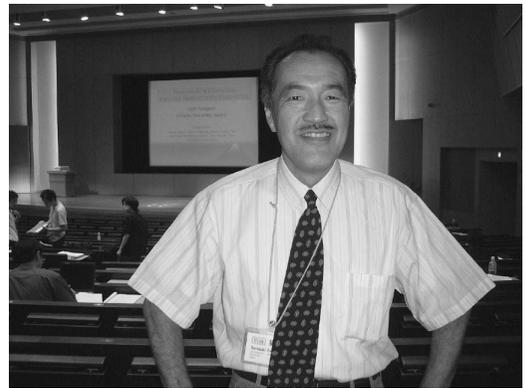


写真1 国際天文学連合IAU第8回アジア太平洋地域大会（2002年2月，東京一橋学術総合センター）にて。二人とも40代の最盛期？なころ。

よう。ネットで検索していたら、ぼくが撮影した写真もヒットしたので、手元のHDDから探し出した元画像を載せておこう（写真1）。

谷口さんと最初に会ったのは天文天体物理若手夏の学校、半世紀も前、1970年代も末のころだ。二人ともM1から参加していたと思うが、夏の学校集録の目次（図1）をみると、以下の話は二人がD1のときだ。宇宙線夏の学校から1971年に天文関係が独立して10年目だったようである。

彼のところでは当時天文分野で使われ始めたCCD（図1ではまだ半導体検出器と呼ばれている）をいち早く導入していて、ダークカレントの処理が問題になっていたんだと思う。ぼくは

*1 『週刊少年サンデー』（小学館）で連載中の漫画・日本テレビ系で放映中のアニメ『葬送のフリーレン』の作中に登場する勇者（編集委員注）

	目 次	ページ
○ はじめに		1
○ 目 次		2
○ 知夏 <small>の</small> 学校プログラム		3
○ 会場風景		4
○ 全体企画		
Galactic Structure —電波で見たGalaxy—	花輪知幸	6
I-ray bursts	金光 理, 大石雅典, 樋田龍男 香 宇張, 花輪知幸, 加藤万梨子	8
X線バーストと中性子星表面での超新星	花輪知幸	11
Active Galaxies —高エネルギーを中心として—	森田光司, 加藤万梨子	13
Active Galaxies	福江 純	16
銀河による銀河系の赤外線観測	小泉 浩	19
半導体検出器の天体物理測定への応用	谷口英明	25
Opticalの現状と将来	仲野 誠	28
Magnetic Stars	川上 肇	31
○ 全体講演		
X線天文学	G. S. Vaiana	35
The Development in Astronomy in 1970's and The Aspect in 1980's	R. J. Taylor	40
I-ray and space astronomy	早川亨男	53
○ 分科会		
(1) 銀 河		
銀河の進化 — AN OVERVIEW —	藤原隆男	55
(2) 太陽		
太陽分科会	柴田一成	57
電波によるコロナの観測	森田耕一郎	59
コロナの加熱	柴田一成	61
○ 懇談会		
日本における光学天文学の将来計画		64
○ 出席者名簿		68

-2-

図1 第10回天文天体物理若手夏の学校(1980年)の集録目次.

理論なので、ダークカレントはもちろん、そもそも CCD の話もそのとき初めて聞いたかもしれない。そんな話のときに、同時期のヒット映画『スターウォーズ』のダースペーダーになぞらえて、“ダースペーダーが出た、ダースペーダーが出た”と連呼していた。いやそれはちょっと無理筋だろうと思いつつ、口調でねじ伏せ笑いを取っていたことをはっきり覚えている。同世代とは思えないほど自信たっぷり、大阪の吉本でも通用しそうな、けったいなやつだと思ったのが第一印象である。

ぼくと同世代にはなぜか優秀なやつが多くて、お互いに切磋琢磨できた(その理由は推測検証し

たことがあり、実証データなどとともに、「研究者40歳ピーク説」として岩波『科学』に掲載されている)。そんな中で、谷口くんは観測系ですごく目立っていた一人だった。

その谷口くんとぼくとは、手法(観測と理論)には共通点はないし、研究対象(銀河と銀河中心方面)も少し異なるし、性格もまったく違うのに*2、なぜかうまがあい、夏の学校やその後も会うたびによく“議論”した。でも、なに話したかほとんど記憶にも残っていないので、しょーもないバカ話ばかりしていたのだろう。

そうこうするうちに、お互いに論文をどんどん書き始める時期になった。ぼくは玉石混交だったが、谷口くんの論文はどうだったやら。分野も違うし読んだこともないので評価しようもないが、きっと似たようなもんだったんじゃないかなあ。そして、お互いに論文が増えてくると、学会で会うたびに“ふくえくん、いま何本になったよー”と論文の数を自慢しに来るので、こっちも自慢しあうという…。しかし、論文って量より質が大事なんだから、なんだか方向性間違っていない? だいたい、量にせよ質にせよ人と業績を自慢しあっても不毛で、比較するなら昨日の自分と比べるべきだろう。いずれにせよ、同世代の優秀な研究者がどんどん良質な論文を書きだして、どんぐりの背比べになってきたためか、だんだんなくなっていく。でも、そんな子供っぽいバカげたことができる唯一の相手だったと思う。

またこれは多少差し障りがあるが、当時は有名な事件だったし、まあ、時効だろう。時間は院生時代に戻るが、すごい実話として、1980年代は大学院生の自治組織である院生会が各大学で活発な時期である*3。東北大で助手の昇進を(一時的だったとは思いますが)院生会が阻んだことがあり、谷口くんはその中心人物だった。いつの時代も天

*2 かれは当時から無茶苦茶系で傍若無人だが、ぼくは少なくとも当時は大人しく人見知りのマジメくんだった——まあ、生き残って言ったもの勝ちの話だけだ。

文は最先端を走っていると思うが、院生たちがもっとも尖っていた時代かもしれない。にしても、院生たちが昇任人事を覆したのは当時の天文界限では一大事件だったし、瞬時にして全国津々浦々に伝わった、当時はよく知られた逸話だった。

もちろん京大の宇宙物理学教室にも院生会があり、理学部全体や全学などの上位組織もあって、ぼくも上の会議にはパシリで参加したこともある。ぼくより少し上の世代が活発で、ぼくたちの世代はやや大人しくなりはじめていたが、まあ、多少は活発ミームを受け継いだのかもしれない。天文天体物理若手夏の学校も、そんな活動的な世代の院生たちが自主的に分離独立してはじめてものだっただろう。そして京大宇宙物理の院生会も、教室運営をめぐる教室スタッフとしばしば衝突もとい議論し、実際、部分的だが教室運営にも院生が関与していた時代である。そして京大宇宙物理でも院生の目からみて無能なスタッフもいたが（いや、あちこちの大学でも無能なスタッフは結構居た；東大のだれそれとか、名大のだれそれとか、当時の全国の院生はみな知っていた）*4、さすがに教室人事まで干渉はできなかった。

ともあれ、当然の帰結として、谷口くんは東北大ではすぐには職が得られなくなったんだろうか、いったん東北大を出ることになった（そのころは理不尽だと思ったが、スタッフを経験した現在では、まあ、わかる。ぼくだってあんなヤツは採用したくないだろう）。そして助教授で東北大に出戻り、さらには、愛媛で一旗揚げることに

なったわけだが、愛媛でも他でも好き勝手に振る舞っていたのは想像に難くない。最後は放送大学だったが、これは故海部宣男さんに後任を頼まれたと聞いた覚えがある。しかし、いまでもあんな骨のある（暴走する）院生はいないだろう。このよしあしはさておき、本当にすごいやつだと思っていたし、いまま思う。

そうそう、共同研究も少しした。ぼくが大阪教育大学の地学に赴任して間もなく、天文分野の前任助教授について、その下の助教授から、“あの人は業績（論文）がないので、このままじゃ、教授になれん。業績をつけてやってくれ”なんて言われたのが発端である。ふつう、助教授が助手に言うかいな、そんなこと。そもそもその助教授自身がやればいいじゃん、とは思ったが、いずれにせよ、論文を書くのはもう苦ではなくなっていたし、新しい分野の研究にも関心はあった。件の前任助教授の一応の専門分野は銀河の理論だったので、谷口くんに相談して協力してもらい、3人の共著論文ができあがったわけである。ぼくが書いたスターバースト銀河の論文は後にも先にもこれだけである。その原著論文の後押しもあって、前任助教授は教授に昇進できたのは後日の話。“ふくえくんも大変だなあ〜”と谷口くんにはしみじみと言われた。

そういえば、谷口くんとは著書数“競争？”もしたなあ。一般向けの解説書はぼくの方が早く、30歳ぐらいから書き始めたが、そのうち谷口くんも一般書籍を書き出すと、それがまあ、どんど

*3 大学に入学したころは、東大安田講堂占拠（1969年）よりは少し後で、大学紛争は下火になりはじめた時期だ。まだバリスト（バリケードを築いて大学に入構できなくすること）はあったし、講義中に白ヘル×手ぬぐいマスクのお兄さんたちが乱入してきて講義をつぶすこともときおりあった。しかし、ぼくたちの世代はいわゆるノンポリ学生（ノンポリはノンポリティクスのことだと思うが、その意味にも無関心なぐらい）で、おいおい、こっちは勉強したいんだよー、と冷ややかな目で眺めていたものだ。大学院時代はその数年後の時期である。

*4 念のために書いておくけど、メールなどまったくない（SNSはもちろんインターネットさえ）。そんな時代（！）にさまざまなことが全国に知れ渡るんだから、当時の院生間の情報連絡網はたぶんすごかったと思う。たとえば、公募があったときなども、どこそこの大学の助手公募には、某大学のだれそれクンがすでに決まっているから、公募しても無理だ、などという情報も流れる。そして結果は事前情報どおりだったりする。メールないのにと驚くかもしれないが、むしろメールがないからこそ、証拠を残さない口コミで精度の高い情報が広がったのかもしれない。

ん書き出したわけだ。そしてまた、学会などで会うたびに、“ふくえくん、今度はこんな本を書いたんだよー”とにやにや笑いながら自慢しに来る。実際のところ、監修本などを除いた単著や数人の共著レベルの書籍は、池内（了）さんや佐藤（文隆）さんは別格として、ぼくと谷口くんが群を抜いて多かったと思う。しかし、その二人が、まるで子供同士がカードの数を自慢しあうような、なんとも幼稚なことである。もっとも、トータル著書数ではぼくの方がまだ確実に多かったはずなので、こちらはハイハイと大人のフリして相手していた（と思う）。しかし、ブルーバックスなどの売れる系新書は、彼の方がたくさん書いたし、まあいいけど。書店で彼の最新刊本をみるたびに、なんか“銀河”とか“暗黒”とかの同じキーワードが入った似たような本ばかり書きやがって、どんな口八丁手八丁で編集者を丸めこんだんだよお。それに、出版社もいっぱい紹介してやったじゃん。などと、ちょっとイラつくのも常だった。でもまあ、これもまた、相手が谷口くんだったからこそ、成り立つドアホ同士のドアホ関係であった。

だけど、そんな関係の谷口くんだったが、ブラックホールシャドーが観測されたとき、いの一番に喜んでくれたのも谷口くんだった。2019年のシャドー発見発表後にはじめて会った際、すぐやってきて、“ふくえくん、よかったねー!!”と心から褒めてくれた。社交辞令などというようなヤツじゃないので、ぼくも彼の言葉がすごく嬉しかったし、なによりもの勲章だと思っている。

しかし、友として語らうのは楽しいし面白い男だったが、同僚や上司としては煩くて困ったやつだったんじゃないかな。そんな面倒な人間を長年にわたり支えてくれた愛媛大学の長尾透さんに

は、悪友にかわり、深く感謝したい。またいろいろ意見をいただいた太田耕司天文学会会長にもお礼申し上げる。そしてこんなメチャクチャな思いつきを掲載してくれた（かもしれない）天文月報編集部にも謝意を表したい。

コロナ禍以降、長いこと会っていなかったが、相変わらず本もどンドン書いていたし、まさか病気があったとは思わなかった。大阪教育大学で始めた高校生への大学進学合同説明会やその各地版などでは、説明会を夏休みにすることが多かったということもあるが、よく、アロハシャツと半ズボンの珍妙ないで立ちで現れた。カウボーイハットみたいなものかぶっていたっけ。おいおい、女子高生も多いのに、すね毛丸出しはなかりうか、そんなヘンテコな先生がいるところ避けられないか。こっちはたいていスタッフ側で忙しく、あのけったいなスタイルを撮っていなかったことが悔やまれる（写真1にアロハシャツを着せれば少し想像がつかろう）。最後に会ったのもそんな会合だった。いまでもあの元気で飄々とした姿が思い浮かぶ。

彼は絶対ぼくよりは長生きすると思っていたので、あまりにも予想外で早すぎた。もっとも、彼の扱いは閻魔様でも困っただろう。舌先三寸で丸め込まれたんじゃないだろうか。いずれぼくが閻魔様の前で取り調べを受けるときには、“ふくえくん、ぼく獄卒頭になっちゃったよー”と、横合いから言われそうな気がする（イヤな予感しかしない）。だから冥福なのは間違いないのだが、いちおう、最後は型どおりに締めくくるとした。

研究者として人として自由奔放に生き抜いた、終生のライバル谷口義明くんの冥福を祈ります。